

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	神野遥香 (こうのはるか)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科 臨床心理学領域 鈴木伸一研究室 修士課程 2年
発表年月 または事業開催年月	2022年 12月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第29回日本行動医学会学術総会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	神野遥香、田島えみ、畑琴音、鈴木伸一
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	がんサバイバーの就労支援制度の利用による就労に関する心理社会的困難の差異
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>がん患者はがん治療による副作用症状や後遺症によって就労場面で困難を抱えることが報告されている (国立がん研究センター, 2018)。また、時単休暇制度や時差出勤制度などの就労支援制度は、がんに関連する症状の対処手段となることが報告されている (須賀他, 2019)。しかし、がんに関連する症状と就労支援制度、就労に関する心理社会的困難の具体的な検討はされていない。本研究では、がんに関連する症状を抱えるがんサバイバーの就労支援制度の利用による就労に関する心理社会的困難の差異を検討することとした。</p> <p>現在就労中で 20—65 歳のがん罹患経験者を対象としたオンラインによる質問紙調査を実施し、185 名から回答を得た。調査項目は、フェイスデータ、がん罹患後の就労支援制度利用の有無 (14 種類、その他)、Japanese version of the M.D.Anderson Symptom Inventory (以下、MDASI ; Okuyama et al., 2003 ; 症状の強さを 0—10 段階で評価)、就労に関する心理社会的困難尺度 (神野他, 2021 ; 「精神・身体症状への懸念」、「就労に対して前向きになれないこと」、「周囲からの理解を得る難しさ」で構成) であった。本研究は早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された (承認番号 : 2021-405)。</p> <p>MDASI が 1 段階以上の者 (痛み 126 名、だるさ 156 名、消化器症状 107 名、睡眠障害 155 名、物忘れ 95 名、しびれ 130 名) を抽出し、就労支援制度の利用の有無を独立変数、就労に関する心理社会的困難を従属変数とした t 検定を行った。その結果、消化器症状時単休暇制度を利用した者の方が周囲からの理解を得る難しさの得点が有意に低かった (順に <math>p &lt; .10</math>、<math>p &lt; .05</math>、<math>p &lt; .10</math>)。しびれがある者において、半日休暇制度と時単休暇制度を利用した者の方が周囲からの理解を得る難しさの得点が有意に低かった (<math>p &lt; .05</math>)。</p> <p>消化器症状や眠気など不定期に出現する症状に合わせた休憩時間の調節や、しびれのような長期的な症状に合わせた就労時間の設定などを行うことで、周囲の理解を得ながら就労する難しさが軽減する可能性が考えられる。がんに関連する症状の出現場面や持続性など、症状の様相に合わせた働き方が可能にする制度を利用することの重要性が示唆された。</p> <p>なお、本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。</p>	

※無断転載禁止